慈済

ものがたり

表見返し●

文・證厳法師/訳・済運/撮影・李白士

知識を智慧に変える

知識で人を批判したり断定したりすれば、
無明が生まれ、こだわりが多くなり、
恨みを買い、後々に禍根を残します。

智慧で道理をわきまえ、
善意に解釈すれば、
心清らかになって煩悩は消え、
すべてが安らかになり、道理が立ちます。

目次

【社論】
初心が貧富を超越する動力となる　慈願／訳　4

【主題報道】
メキシコ地震　愛は断層を超える
一万の家族のために奔走　黒川由希／訳　8
高嶋由紀子／訳　30

【特別報道　台湾花蓮地震】
大量負傷者受け入れ体制を敷く
自然と人命救助を最優先する　済運／訳　38
物資を結集
毛布と福慧ベッドが大至急列車で送られた　済運／訳　43

【慈善テクノロジー】
火傷患者のリハビリテーションに最適の一着
新型高機能涼感加圧服　本諦／訳　48
自由になるために
辛いリハビリに励む　本諦／訳　51

【特別報道　慈済青年人文交流】
貴州の希望　済運／訳　56
夢を達成する勇気　済運／訳　64
慈済青年ボランティアの成長　性和／訳　83

【證厳法師のお論し】
生命を善用して　慧命を成就させる　慈願／訳　88

【衲履足跡】
戒を制度とし、愛で管理する　済運／訳　100

慈済大事記【二月】　済運／訳　106

表紙

２０１７年１２月、慈済はメキシコの地震被災地区で９回の物資配付を行ったが、その時は多くの現地人も同胞を助けようと自主的に集まった。これは１２月１４日、ホフトラ市民が慈済のボランティアのチョッキを着て配付活動の事前作業に協力し、メキシコの国旗を掲げたときの様子である。（文＆撮影・黄筱哲）

初心が貧富を超越する動力となる

◎訳・慈願

毎年の歳末には世界中の慈済人が感謝と祝福に満ちている。世界各国から新しい委員（慈済の幹部ボランティア）たちが證厳法師の認証を頂き、また彼らの感動的な悲願を聞くことができる。なかでも遙か遠い国からきた新委員の話は人々を奮い立たせる。台湾で始まった菩薩道が海外のボランティアにも広く繋がり、原動力と自信になっていくことを証明していた。

昨年の十一月十一日から二十六日まで、二千人以上の海外の慈済人が台湾へ認証を受けにやって来た。肌の色が違っていても、言葉や経済的な差があっても、皆の愛の心と善念は同一である。

證厳法師から「黒い真珠」と称えられているアフリカのボランティアは、貧しく非常に厳しい生活環境にある。しかし、長年にわたるボランティアの努力と人々の賛助によって、台湾への旅費を工面することができた。彼らは、喜び勇んで心霊の故郷へ帰って薫陶を受け、自分たちの経験を皆と分かち合っていた。

主に女性が多いアフリカのボランティアは、静思精舎の自力更生の精神にならって、地域で裁縫のワークショップや環境保全活動、菜園を運営している。さらに国外へ出て、他国の貧しい人々を救済している。物資配付と慈善活動の足跡は連綿と千里に及び、アフリカ七カ国にわたっている。

「世界手袋大王」といわれる企業家の林偉才も今回認証を受けに来た一人である。彼はかつてアフリカでエボラ出血熱、ビルマでＨ１Ｎ１（新型インフルエンザ）が猛威をふるった際に、医療用手袋や物資を援助した。善行とは忍耐と気力によるものであることを深く身にしみて理解しており、

その価値は金銭を以ても計り知れないと話す。

慈済の慈善救済は、貧富を問わず、愛の心が凝集した救済である。最近記者が支援団に随行して大地震発生直後のメキシコへ行った際も、大勢のメキシコ人が自発的に集まって、支援物資を被災地へ送っていたのを目の当たりにした。被災者のハイメーは、田畑や農機具は壊滅状態で、家も住めなくなり、長年の苦労が水の泡になったと嘆いていた。しかし、毎日慈済ボランティアが被災者の訪問に行くのに、自転車に乗って一緒についてきて、協力していた。

ハイメーは自分の住んでいる土地に奉仕したいと心から願っていた。「最も大切なことは愛です。私たちは孤独ではありません。そばには私たちに寄り添い、守ってくれる人たちがいますから」と言った。慈済に参加した日々が楽しかったそうだ。彼のほかにも、多くの被災者がボランティアに参加していた。

メキシコは古代文明発祥の地の一つであり、かつては歴史上世界貨幣を左右していた「白銀帝国」だった。一九四〇年代に工業現代化が幕開けしたが、いまだに貧富の差が大きい。多くの国民はお金を稼ぐためにアメリカに不法入国する。そうして、麻薬売買や密貿易などの犯罪に手を染める者が急増した。メキシコは国際社会のメディアによって「麻薬売買の巣窟」であるかのように報道され、悪いイメージをもたれている。

しかしながら、多くの純朴な民衆は、勇敢にもこの困難な状況において、物資の乏しい不平等な生活にたくましく向き合い、わずかな物資を分け合う度量を持っている。

これは仏典の中の「貧者の布施はたったの一粒でも、富者が布施した千万金の布施と同様の無量功徳がある」という言葉そのものだ。慈済は今年、創立から五十二年目に邁進するが、その原動力となっている初心は、愛と善が集まったものである。

メキシコ地震

愛は断層を超える

◎文・黄秀花　撮影・黄筱哲　訳・黒川由希

まもなく新年を迎えるメキシコの被災地の多くは、三カ月前の地震後の状況を残したままだ。地殻の三つの大プレート上に位置するメキシコでは、この百年間にわたって地震が多発している。本来の地質環境に加え、開発、社会情勢の影響で、震災後の復興は思うように進まない。

華人を主とする慈済チームは、異国の地で慎重に、一歩ずつ確実に、見えない壁を越えて現地の人々に溶け込んでいる。

●２０１７年１２月中旬、メキシコ地震の被災地には崩壊した建物がそのまま残っていた。再建の準備のため、ハンマーなどの道具を手に、素手で取り壊しを行う。右側の丸い屋根の建物は、今回慈済の災害援助の起点となったソチミルコ市の古い教会である。

●宗教の力

メキシコシティ郊外のソチミルコ市にある古い教会は、地震で壁の一面が倒壊したが、瓦礫を取り払った後、何とか使用できるようになった。十二月十五日、人々の心を安らかにしようと、フランシスコ・エフラン神父はいつものようにミサを行った。

教会はサン・グレゴリオ地区にあり、フランシスコ神父は神職に就いて二十八年になる。震災後、各界の慈善団体が被災者を援助できるよう、教会を開放した。神父はまた多くの人が互いに助け合い、愛し合うように願っている。

メキシコ地震ファイル

●メキシコの紹介：
人口１億２０００万人、面積１９６万４０００ｋｍ２。公用語はスペイン語。地殻の３つの大プレート上に位置し、地震が頻発する。

●地震災害状況：
２０１７年９月、マグニチュード６以上の地震が連続して３回発生、そのうちの１回は現地時間１９日午後１時１４分のマグニチュード７.１の強震で、３回の中で最も多くの死傷者が出た。
１９８５年９月１９日のメキシコ地震では１万人近くが被災、その３２年後の記念日当日に再び大地震が襲った。震源地であるラボソは首都からわずか１２０ｋｍの距離にあり、死者３７０名、６０００人以上が負傷した。首都メキシコシティ及びモレロス、プエブラ、ゲレーロ、オアハカなどの州が大きな被害を受け、全国で家屋４万４０００棟、１万２７００校の学校が損壊した。

●地震後三カ月

被災地のホフトラでは、家が傾いて住むことができなくなったため、高齢の女性が両足を押しつぶされた孫娘とともに、テント生活を送っていた。

ホフトラはメキシコシティ南部のモレロス州に位置し、重要な商業都市。地震の後、古跡や商業地区は大きな被害を受け、今なお多くの人がテント生活を送っている。

２０１７年
メキシコ地震
慈済災害援助地図

◉ 震源地
■ 被災地域
■ 物資配給地点

１２月７～１６日

●首都：メキシコシティ
メキシコシティ、ソチミルコ市、トラウアック市で５回の物資配付、４回の無料診療を行う。

●モレロス州 ホフトラ市、トラキルテナンゴ市、サカテペック市で４回の物資配付、４回の無料診療を行う

計１０３５５世帯に現物引き換えカード、エコ毛布を配付した。無料診療を延べ４４９１名が受診した。

元はリビングで、倒壊後撤去した空き地は物干し場に変わっていた。被災後の日々は決して楽なものではないが、祖母と孫娘が寄り添って暮らせることは、何よりの幸せである。

●一歩一歩を大切にする

１２月１０日、１３国・地域からやって来た１００人以上の慈済ボランティアと医療チームがホフトラに入った。現地のボランティアの案内の下、市街地を周って被災状況を確認し、無料診療と物資配付の準備を行なった。

大地震の襲った９月１９日の後、９月２５日に１１人のボランティアがアメリカとメキシコから集まり、ホフトラで被害状況を視察した。その後、再び視察を行って物資配付の会場を準備した。被災地に戻ってくるという約束を果たし、現物引き換えカードと毛布を２８００世帯以上に届けた。

約束を果たす

メキシコはカトリックの国である。慈済の災害援助は宗教や種族、地域を分かたず、物資配付の会場では神父が聖水をまき、ボランティアたちはメキシコ国旗の下で共に伸び伸びとメキシコ国歌を歌った。

一月十五日、サンティアゴの教会では八度目の物資配付と無料診療が行われた。九月二十六日にここへ来て被災地を視察し、神父と良い縁を結んだ慈済グローバルボランティア総監督の黄思賢（右端）は、「慈済の愛は時間、空間に阻まれることはありません。私たちはまたここへ戻って来ました。将来、『愛』と『思いやり』を携え、またきっとここに戻って来ます」と語った。

●直接、そして確実に

慈済ボランティアは十二月七日、トラウアック市で初の物資配付活動を行った。市民は配付通知書を持って入場し、家族の人数に応じた額や量の現物引き換えカードと台湾から送られたエコ毛布を受け取った。

ボランティアの安全を守るため、市から派遣された武装した軍人や警察官が警備に当たった。

●心身を癒す

手を骨折したある高齢者は、しばらく薬を交換しておらず、助けを求めて慈済の無料診療ステーションにやって来た。医師は治療をするかたわら、患者の気をまぎらわそうと歌を歌った。

無料診療エリアには、ひっきりなしに市民が行き交った。腎臓病や高血圧、糖尿病などの慢性病を抱えている人のほか、多くの心的外傷後ストレス障害の人々が訪れ、震災後、食べ物が喉を通らない、眠れないなどと語り、また倒壊した家屋を再建できない不安やストレスを訴えた。

西洋医学の医者は心身を癒す薬を処方し、東洋医学の専門家は鍼灸や整体で苦痛を和らげた。しかし最も重要なのは、話を聞くことだった。言葉は通じなくとも、温かな視線や言葉、またスペイン語に通じたボランティアに通訳してもらって人々の心を慰めた。

●毛布リレー

人々は物資を受け取ると、皆親指を立てて、ボランティアに感謝の意を伝えた。

救援物資は台湾や世界の慈済人から送られた愛と思いやりである。台湾のボランティアが緊急に送ったコンテナ二つ分、一万二千六百枚のエコ毛布が船で約一カ月の時間を経て輸送され、現地メキシコの「食糧基金会」の協力により、輸入関税が免除された。物資はメキシコの台湾人実業家、方台生の倉庫に届き、荷下しして数を確認し、再包装した後、各地の配付会場に送られた。

●慰めは良薬なり

アルゼンチンのボランティア、洪良岱（下写真中央）は十月十二日にメキシコに入国した。十二月十八日に出国し、二カ月の長きにわたってボランティア活動に従事した。視察チームの一員である彼女は、人々を率いて被災者を訪問し、また現地のボランティアを訓練して経験を伝えた。

現地のボランティアの案内により、慈済人は入り組んだ街道に入って人々を訪問することができた。ベビーカーを押しながら、被災家庭リストを手に家庭訪問する母親を見て、洪良岱は「平凡な主婦でも世の人々のために奉仕することができる」と強く感じた。

洪良岱は、「慰め」は良薬だと語る。家庭訪問や物資配付の際、多くの被災者がボランティアの肩に顔をうずめて泣き、ボランティアが熱心に被災者の苦しみに耳を傾ける光景が見られた。

『無量義経』に「苦既抜已、復為説法」とある。多くの被災者が自らを奮い立て、ボランティアとなったことは、この言葉の最良の証である。

一万の家族のために奔走

◎文・蕭芳芬　写真・黄筱哲　訳・高嶋由紀子

なぜそれほど長い期間をかけて救援物資の配付名簿を確認しなければならないのでしょうか。
なぜこれほど多くの住民が慈済の列に加わるのでしょうか。
実際に救援活動に参加しなければ、その苦労と感動は理解できないでしょう。

メキシコは、太陽と情熱の国で知られ、国民の幸福度が非常に高い国です。ソンブレロ、ラテンミュージック、ダンス、私がメキシコについて知っていたことと言えばたったこれだけで、自分がメキシコの地を踏むことなど、想像だにしていませんでした。

メキシコ地震が国際ニュースで盛んに報道されたのはたった数日間のことで、まもなくメディアは日常に戻りました。メキシコで被災した住民は何もしてくれない政府への怒りを募らせ、被災調査に訪れた政府の職員を市民が拳を振り上げて追い立て、ついには職員がトラックに飛び乗って逃げるという事態まで起きていました。

被災地の範囲が広大だったため、慈済はまずスタッフを派遣し、二カ月以上にわたって災害状況の調査、準備、その後の作業を行いました。その過程には被災した住民の名簿の取得と確認作業が含まれ、ボランティアが住民の家を一軒一軒訪問し、家屋が全壊、半壊、軽微な損壊であるかなどの判定を行いました。

その作業が長期間にわたったことに加え、住民の政府に対する不信感、政党による視点の違いなどから、慈済のボランティアも住民を騙してデータを盗みに来たのではないかと疑われるなど、その苦労は並々ならぬものがありました。

アルゼンチン出身でスペイン語に精通した洪良岱師姐（師姐は慈済の女性ボランティアに対する呼称）によると、最初に市役所から受け取った被災者名簿には、人名や住所といったわずかなデータしかなく、十回にわたる聞き取り、説明、修正などを経て、ようやくかなり正確な被災世帯数とその人数のデータを得るこ

とができたのです。

たとえ一つのハウスナンバーであっても、門をくぐったら三つの家だということもあります。結婚した長女や次女が敷地内にそれぞれ家を建てるからです。正確な人口数と戸数を把握し、十分な物資を届けるには、実際に足を運んで調査するよりほかなかったのです。

この過程はかなり繁雑で、時間も労力も使いました。市の人的支援を受け、先に慈済ボランティアを派遣して自ら作業を行うだけでなく、メキシコ国内のボランティアに被災した住民への関わり方を指導しなければなりませんでした。そうしてようやく十二カ月にわたり、一万世帯以上を対象とした大規模な物資配付と無料診療を行うことができたのです。

八カ所で八回の大規模な物資配付

十三カ国から百四十人を超える慈済ボランティアがめいめい到着し、さらに大勢のメキシコ在住のボランティアも参加しました。配付地点は八カ所もあり、その中には中南米最大の水上公園や二万五千人を収容できる大型サッカースタジアムもありました。なんと大きな挑戦でしょう。

場所を借りることから、テントの設置、水源や電力の確保、仮設トイレの準備、机や椅子の設置、現場の動線の配置、それに漢方医、西洋医、歯科医の診療のために、診療器材や薬品を準備するなど、仕事は膨大で苦労に満ちたものでした。不慣れな異国で、費やした労力や時間は計り知れないものです。

米国のボランティアチームは、現物引き換えカードの配付について経験が豊富であり、住民の動線の案内、カードの確認、待合スペース、チェックエリア、受け渡しスタッフ、最後に金額を確認して支給する出納エリアなど、各方面が専門的な段取りのもとにありました。中でも特筆すべきは、チェックエリアと受け渡しのスタッフは全てメキシコ国内のボランティアによって担当されていたことです。

無料診療についてもすばらしい状況でした。十人の医師たちが診察を行う傍らには、医師一人につき一人の英語とスペイン語の通訳ボランティアが付きました。漢方医は鍼灸、整復治療等を行いました。歯科医は歯のクリーニング、抜歯、歯みがき指導など全面的なサポートを行いました。

この八回の無料診療には、高額な医療費を支払うことのできない人々が互いに

●慈済によるメキシコ地震被災地における最初の救援物資配付がトラウアック市で行われた。ステージで「シェリト・リンド」、「一家人」などの歌を合唱し、遠方から支援にやってきたボランティアにハグをする住民たち。

知らせ合って訪れ、連日長蛇の列を作りました。

団結し、愛を循環させ続ける

毛布、竹筒、ビタミンのサプリメント、静思語カードの配付スペースは、最も楽しく、最も温かな場所でした。現物引き換えカードをもらい、ボランティアの手から毛布を受け取った住民たちは、必ずボランティアに大きなハグをし、笑顔で希望と感激に満ちた瞳で見つめました。スペイン語の言葉は分からなくとも、ボランティアは住民たちの真心と純朴さを感じることができました。

ボランティアは住民に「ビタミン剤は体力を補い強め、静思語カードは心と智慧の強化剤です」と伝えました。

竹筒の貯金箱が伝える慈済精神は住民の心に染みこみ、多くの人が「竹筒がいっぱいになったらどこに持って行けばいいのか」と尋ねました。「教会に持って行って、助けを必要としている人を一人でも多く助けてほしい」とボランティアは答えました。

カトリックを信仰するメキシコ人は、深い愛の心を持っています。今回の地震でも、非常に多くの人が地元で自発的に慈善団体を組織し、災害支援を行いました。しかし、総じてグループの人数は多くなく、親戚や友人、隣人らが何人か集まって、自宅の付近や地域で水や食べ物、衣服などを配るといったものでした。災害支援の団体が多すぎて、市役所も番号を使ってこれらの臨時的なボランティア団体をまとめるしかありませんでした。

二カ月ほどして、臨時的に組織された団体はほとんどが解散しましたが、愛の心のある人たちが慈済人の呼びかけの下で団結し、今回の大規模な支援活動に協力してくれたことは本当にありがたいことです。彼らは、慈済人が遙か遠い国から彼らを手助けに来たこと、そして無私の心で人に尽くし、広い心で助けを必要とする人を一人でも多く助ける方法を学べたことに感激しています。

メキシコ人は話好きで口が達者ですが、しばしば身勝手に自分の言いたいことばかりを言い、そのためいざこざや不信感が生じてしまいます。慈済人はそこにも愛をもたらし、愛の連鎖を生み出しました。悲しみを笑顔に変え、思いやりで人々の心を温めました。愛の力がますます大きく、いたるところに広げられ、一人ひとりが愛に満ちた美しい朝日を迎えることを願っています。（詳細記事は『慈済月刊』二月号をご覧ください）

大量負傷者受け入れ体制を敷く
自然と人命救助を最優先する

◎文・黄昌彬、黄秋恵　撮影・陳安俞　訳・済運

花蓮慈済病院は地震発生後、直ちに大量負傷者受け入れ体制を敷き、四百八十五人の病院関係者が救急外来に集まった。皆、体制が解かれる二時間二十分後まで力を合わせて百名以上の負傷者の世話をした。

「今までこれほど大きな地震に遭ったことはなく、大量の負傷者が送られてくることが予想されました。私は宿舎から病院に来る時、病院の建物の状況に注意しながら、約五分で救急外来に着きました。臨時指揮官の下に標示看板が置かれ、区画されると共に、病院関係者は迅速に集まりました」と総指揮に当たった花蓮慈済病院の林欣榮院長が言った。

二月六日午後十一時五十分に強い地震が発生し、十分以内に十五人ほどの住民が救急外来に来た。その日、救急外来の当直医だった陳煌浜医師は統帥飯店が倒壊したと聞き、すぐに大量の負傷者を受け入れる体制を敷く状況だと感じ、大勢の医療人員と医療機器を救急外来で待機させた。

統計によると、大量負傷者受け入れ体制に入った後、医学部実習生も含めて百十八人の医師と四十八人の医療技師、二百十九人の看護人員、百人の事務関係者、合わせて四百八十五人が緊急体制に対応した。

●陳煌浜医師（中央）は大量負傷者受け入れ体制を指揮し、医療人員は素早く反応して各部署に就いた。

普段の訓練が機能を発揮した

病院に送られてきた患者の数は瞬く間に、二十人、三十人と増え、またたく間に五、六十人になった。短時間に訪れた百人から二百人もの患者とその家族に医療人員を加えると、四、五百人の人が救急外来を出入りしていたため、臨機応変にスペースや人員、器材を配置した。

慈済病院では毎年、大量負傷者受け入れ体制の訓練を行っており、今回、現場で指揮をとった陳煌浜医師は、「約百人の患者は地震発生から二時間以内に病院に来てます。後の統計によると、救急外来で処置した中で地震で負傷した人は百二十人ほどで、ほかは軽傷だったにもかかわらず、恐怖で家に戻れず、病院にいることを選んだ人たちでした」と言った。

陳煌浜医師によると、二月七日午前零時十分に大量負傷者受け入れ体制を始動し、午前二時半にはほとんどの患者の処置を終えた。また、花蓮市のほかの病院と連絡を取り合い、慈済病院に転院して来る人がいないかどうかを確認してから、受け入れ体制を解除し、当直人員がその後を引き継いだ。

医療人員を休ませたのは、その後の数日間により多くの負傷者が訪れた場合を考慮し、充分な医療人員の続投が必要となるからだ、と陳煌浜医師が説明した。

緊急時は患者が最優先

救急外来の看護師である張雅雯は当日、午後の当直で、ちょうど仕事を終えた時に地震が発生し、そのまま残った。負傷者は側に看護人員がいることで気が落ち着くため、患者一人につき一人の看護士を配置するようにした。張雅雯は病院ボランティアが数多くの患者を落ち着かせたことに感謝した。

花蓮慈済病院外傷センターの王健興主任は大急ぎで救急外来に行き、現場の指揮官に報告した後、重症者対応に配属された。そこには救急外来の看護師やＩＣＵから支援にきた看護師もいた。

「重傷者対応エリアはすでにいっぱいだったため、続けて重傷者が送られて来た場合に備えて、迅速に患者を治療して救急外来から転出させ、いくつか病床を空けておきました。私は重症区画の出入り口に立って外の様子を見ていました。まもなく人の叫び声が聞こえ、二人の人が走ってベッドを取りに来ました」

王健興は車の側で走りながら、車に乗

っていた患者が危険な状態に陥ったのを見て取り、もう一人の医療人員が病床に飛び乗って応急処置を始めた。彼は大声で道を空けるよう叫びながら、病床を重症者対応エリアに入れた。午前二時近くで、患者が病院に到着した時はすでに瞳孔が開き、救急処置を行ったが、命を救うことはできなかった。

王健興は午前三時近くに帰宅したが、六時過ぎに起床して出勤した。そして外傷センターで翌日の午前八時まで当直し、続いて午後五時過ぎまで手術を行った後、やっと家に戻った。帰宅途上、麻酔科の蘇逸愷医師に出会い、互いに家の状況を尋ね合った。

本当は王健興も家の状況をあまり把握していなかったが、他県から来た蘇医師は怯えて宿舎に戻ろうとせず、ボランティア宿舎に泊まった。「多くの看護師は怖がって当直室に泊まっていますよ」と彼が言った。

陳宗鷹副院長によると、救急外来だけでなく、各病棟の看護師たちは自分の恐怖心を横に、ショックを受けた患者とその家族たちをなだめていた。「患者が最優先」という精神は人々を感動させた。

物資を結集

毛布と福慧ベッドが大至急列車で送られた

◎文・蔡堆　撮影・江昆璘、蕭耀華　訳・済運

短時間の停車の間に大量の物資を降ろすのは大変な作業で、台湾鉄道会社の職員と乗客、ボランティアが力を合わせて任務を完了させた。

●毛布と福慧簡易ベッド、飲料用粉末パックなどの物資が台北から汽車で花蓮駅に到着し、ボランティアたちが駅員の協力の下に、迅速に荷物を運んだ。

一月七日未明、慈済花蓮防災協調センターからの電話に起されて初めて、花蓮で地震が発生し、被害が出たことを知った。花蓮の慈済ボランティアはすでに夜通しで動員され、災害支援関連の仕事を展開していた。寒い冬には炊き出しと毛布、マフラー、福慧ベッドが必需品だが、一部の物資は当地の在庫では足りなく、各地の物資倉庫から花蓮に送る必要があった。

まず寒い天気に最も有効な環境保全毛布は台北内湖の倉庫から調達しなければならない。私は夜中にも係わらず、ただちにＳＭＳメッセージを送って、台湾鉄道の局長と幹部たちに支援を求めた。また、物資関連の師兄（シーション）や師姐（シージェ）たちに、すぐ毛布とマフラーを内湖から松山駅に送るよう連絡した。

鉄道会社から線路に損傷はなく、通常に汽車が運行できる、と連絡があった。ちょうどボランティアがすでに毛布を駅のプラットフォームに運んでいたため、第一陣の物資は始発の列車に間に合った。

急を要し、ボランティアの数も多くなかった中、汽車が停車する短時間に百ケースもの物資を積み込むのは相当な困難が伴った。しかし、幸いにも慈済ボランティアのほか、車掌や駅職員、一般乗客も手伝ってくれ、リレー式に荷物を積み込んだ。

列車が花蓮に着いてからの荷下ろし作業にも大勢の人が集まり、慈済ボランティアや鉄道職員、乗客が心を一つにして協力し合った。

直行便の愛・助け合う縁に感謝

台湾鉄道は二月七日から九日まで毎日、二便以上の列車を使い、災害支援用物資の輸送を無償で行なった。その中には次のような感動的な出来事があった。

二月七日、二番目の列車が松山駅に到着したが、その列車には貨物車両がなかった。客車の通路に物資を置くと乗客の出入りに影響するため、考えあぐねていた時、車掌が機転を利かし、物資を空いた座席に置くよう指示した。その列車は松山を出た後は花蓮まで止まらないため、乗車して来る客はいない。百ケース以上の物資にも席ができたのだ。

しかし、花蓮駅でも問題が起きた。その列車の終着駅が台東だったため、花蓮に停車する時間がとても短く、切羽つまった荷下ろし作業の情景が想像できると思う。

各列車には支援用物資のほかに一、二名のボランティアが随行した。彼らは臨時に動員されたため、切符を買う時間もなかった。汽車の中で切符を買おうとした時、車掌は証明書を発行しただけで、花蓮駅に着いた時に出せばいいと言った。結局、切符代は要らなかった。

二月八日の午前中に物資を送り終えた後、少し休憩し、翌日の午前中にまた、輸送作業をすればいいと思っていた。思いもよらず、昼近くになって宜蘭と羅東から福慧ベッドを花蓮に緊急輸送しなければならなくなった。

台湾鉄道の局長は私に、翌日午前中の列車で一緒に輸送できないかと相談したが、「それはできないことはないが、今晩、一部の被災者は床に寝るしかないでしょう」と私は答えた。すると、局長は全力で協力すると言った。本当に感謝の限りである。

天災や無常はいつも多くの苦難と心細さをもたらすが、往々にして数え切れない心温まる良縁をももたらす。この機会に皆にこの世の温かさを感じてもらいたいと思い、この一文を書いた。また、支援を提供してくれた全ての人間菩薩に感謝したい。

（慈済月刊六一六期より）

火傷患者のリハビリテーションに最適の一着

新型高機能涼感加圧服

火傷患者には傷痕の痙攣と収縮を防止するために、毎日二十二時間以上加圧服の着用が必要です。

大愛感恩科学技術会社と陽光基金会、国智経編工業会社及び台湾科学繊維会社が共同開発した第十作目の加圧服は、通気性に優れて涼感があり、加圧値が高く、伸縮性にも優れています。日夜患者の心と体に寄り添うという思いやりの心から誕生しました。

◎文・黄秀花　撮影・顔霖沼　訳・本諦

●2年前に発生した八仙水上楽園での爆発事故で、林佑軒さんは熱傷面積60パーセントの火傷を負った。徐々に回復しているが、今も加圧服で傷痕を圧縮しなければならない。今着用しているのが第10作目の加圧服である。

自由になるために、辛いリハビリに励む

◎口述・林佑軒　整理・黄秀花　撮影・顔霖沼　訳・本諦

加圧服の機能

◎資料参考・陽光基金会

▼皮膚組織の膨張を軽減し、傷痕を比較的平らに、薄く、柔軟にします。さらに色も薄くする。

▼傷痕の痛みと痒みを減らす。　▼再生した皮膚を保護する。

着用のポイント

▼加圧は持続的かつ適度に平均的に行う。通常は一～二年以上の着用が必要である。

▼シャワーや傷痕の治療やケアをする時に一時的に脱いでもよいが、一時間以内とし、就寝時にも着用する。

▼もし傷痕に加圧治療を施さなければ、皮膚組織は痙攣と収縮を起こし、体の活動に支障が出て、手術が必要となる。

バスケットボールや卓球をやり、
ジムに通い、
バイクで出かける私は、
普通の人と変わりがありません。
頑張ってリハビリに励み、
一日も早く束縛から解放されて、
母とお世話になった皆さんに
恩返しをしたいと思っています。

八仙水上楽園で粉塵爆発事故が起こったとき、私は二十七歳でした。事故で受けた火傷の面積は六十パーセントで、手足のすべてを含み、その熱傷深度はⅡ～Ⅲ度に達していました。三軍総病院で十三回の手術を受け、傷痕の処置と皮膚の移植を受けました。頭と背中、腹、太ももの内側から皮膚を取って移植するプロセスはとても痛く、辛い治療でした。

ICUから一般病棟に移された後、自分でできないことが増えたことに気づきました。ベッドから降りると平衡感覚を失って、ろくに座ることもできませんでした。歯磨きやシャワー、トイレは全部母が手伝ってくれました。

徐々に傷口が癒合したので、箸を持つ練習を始めました。最初は指を開くことも曲げることもできなかったので、とてもがっかりしました。ある日ようやく食べ物を挟むことができて、すごくうれしかったです。その時の様子を友人に写真に撮ってもらいました。退院してから家に帰った直後は、毎日階段を上ったり降りたりすることがとても大変で、何歩か歩くとすぐに休憩をしなければなりませんでした。

退院後、母親は毎日私を「陽光民生東路リハビリセンター」まで車で連れて行ってくれました。リハビリやシャワー、薬の付け替えや傷の加圧のためです。また、火傷によって手と足は発汗できなくなり、その代わりに胸と背中から大量の汗が出るようになりました。そのため、ベッドシーツがびっしょりとぬれてしまうので、母は常にシーツを洗わなければなりませんでした。また、私のために高蛋白質の栄養食品を買ってきてくれたり、ジュースを作ってくれたりして、母は本当に忙しかったと思います。

火傷をした後、母の愛は偉大なるものだとつくづく感じ入りました。そのために私は真面目にリハビリを受け、加圧服を着用しています。ただ、天気が暑くなると、湿疹が出て、かゆくなって腫れたところを掻いてしまい、そこが傷口になっていつも血を流していました。起き上がった時には、下半身が膨張して、痛くてかゆくて、とても気持ちが悪かったです。

事故の後、證厳法師は大愛感恩科学技術会社に通気性に優れた快適な加圧服を研究開発するよう委託されたと聞きました。二〇一六年六月から私は第九作目の加圧服を試着することになりました。そ

の頃、傷痕はほとんど回復していましたが、新しくできた皮膚はまだ薄かったので、破れないように、母親は注意深く力いっぱい加圧服を引っ張りながら着せてくれました。

加圧服は大変涼しいのですが、かなりきつくて、着心地はよくありません。でも、実験が終わるまで、私は頑張って着用を続けました。半年の間、常に大愛感恩科学技術に意見をフィードバックしました。改良後の完成した第十作目はとても着心地のいいものに仕上がっていました。弾力性があり、通気性も良く、冷やす効果が長く継続し、加圧値は二十五ミリHGで皮膚にも密着するので、傷痕を加圧する機能はかなり良くなりました。

それを着用してリハビリを受けると、動きが自由自在になったように感じました。この加圧服を作った研究開発チームに大変感謝しています。私たちのような患者に全身全力でケアをしてくれました。

火傷をする前、私はよくジムに通い、バスケットボールや卓球をしていました。今は回復して、これらの運動を続けていますが、鉄棒に吊り下がることはまだできません。新しくできた皮膚は薄いので、鉄棒を摑むと皮膚へ力がかかりすぎて痛くなりますし、皮膚が破れる恐れもあるからです。

痙攣と収縮が発生しないように、加圧服は一日中着用しなければなりません。不便ですが、黒い加圧服を着用して、自転車に乗っていると、スポーツ用のスパッツを着用している友人たちと変わりがありません。見た目もいいし、機能性に優れ、川辺や小道を走って微風に当たると、涼しく感じられます。

今度の新しい加圧服が早く傷痕を平にして、回復を早めてくれるよう期待しています。そして私たちも束縛から解放され、自由になれることを願っています。

●ひどい火傷を負う前、林佑軒さんはスポーツや旅行が大好きだった。火傷の後は、母親の付添いと細やかなケアを受けながら、いちはやく回復し、ふつうの生活に戻れるよう、頑張ってリハビリを続けている。

貴州の希望

貴州の大学生の夢は？
台湾の大学生はどんな生活？
彼らの互いへの好奇心と共に手を携え、
愛とケアを大山のこどもたちに与える中で、
今まで気づかなかった自分に出合った。

◎文・張麗雲　訳・済運

●中国と台湾の若者と慈済ボランティアが家庭訪問活動を行った。苗寨排焼村でミャオ族の歓迎を受け、民族衣装を着せてもらった台湾の慈青ボランティア。（撮影・林櫻琴）

二〇一七年八月四日、台湾の六人の慈青（慈済の学生ボランティア）と九人の慈済ボランティアは、中国の青年ボランティアと交流するために、桃園国際空港から二時間半の距離にある中国貴州の貴陽に向けて飛び立った。

貸し切りバスがホテルに着いた時、到着を待っていた中国の青年ボランティアたちがホテルの玄関口に一列に並び、「本当に会えて嬉しい。心から喜びで迎えたい。いらっしゃい！」という歌声と共に熱烈な拍手を送った。少しずつ輪が縮まり、柔和で澄んだ歌声が響き渡った。「青い空、白い雲が訪れ、そよ風が陶酔させてくれる。花が咲き、山が赤く染まる。夜空の星はあなたのために輝いている。僕は貴州で待っていた、君と会える日を。この素晴しい日を……」

慈青たちは目を見張り、ボランティアは不思議そうな顔をした。「何という美しいメロディー！　それは何という歌？」と聞くと、『貴州で君を待っている』という歌です」という返事が返ってきた。

貴州の音楽家、張超が作曲し、貴州丹寨県出身の玉鐲兒が作詞したこの歌は、多彩な貴州の景色と民族風情を織り込んでいる。

中国の青年ボランティアは慈青とボランティアを取り囲む輪をさらに縮め、歌声と笑い声がホテルのロビーに響き渡り、皆目を赤くした。

支援を受けた日々、人助けする今

「なぜ泣くのですか？」と　貴州羅甸県のプイ族の青年ボランティア、羅必語は、ボランティアの張麗雲の肩を抱きしめて泣いた。「あなたたちを四月からずっと待っていました！」

羅必語には五、六歳年下の従妹がいる。叔父と叔母は他県へ出稼ぎに行き、誰もこの子に関心を持ってくれないため、勉強しなくなった。その後、叔父と叔母が離婚した。従妹は学校の寮に入っているが、親の愛に教師が取って代わることはできない。

「従妹は不健全な環境で成長すれば、愛に飢え、心に不満を抱えてしまうと思うのです。私では力不足で助けてあげることができません。慈済のおじさんやおばさんが、こうした孤独な子どもたちの問題に気づき、交流に来てくれたことにとても感謝しています。感情が高ぶって、あなたたちを見たら涙が止まらなくなったのです」

●貴州の大学生ボランティアが拉揽小学校の校庭から校門まで愛の架け橋を作って、帰郷する小学生を見送った。（撮影・林玲悧）

羅必語は貴州民族大学文学部で中国少数民族言語文学を専攻しており、もうすぐ四年生になる。彼女は中学生だった時、慈済の就学助成金を申請した。「慈済は一年に四回来て、山の貧困家庭の子供たちに立志のお話をして聞かせています。慈済が私たちを愛していることを感じて、来る度に感動させられます。慈済のおじさんやおばさんは天使のように私たちを愛してくれます」

慈済は一九九七年から貴州で貧困者支援をしており、学校の建設や村の移転支援、就学支援、冬季配付活動などを行ってきた。この二十年、支援を受けた子供たちは成長して大山を出て高等教育を受け、掌を上に向けていた子供が人生の転換期を迎えて、掌を下に向けて奉仕することを学ぶようになった。彼らは将来、医者や技術者、教師、母語文学研究者となり、郷里に恩返しするであろう優秀な学生なのである。

先輩の導きで大山を離れた

慈済の就学支援を受けている貴州の学生と台湾の慈青は、九日間の交流活動の中で、三都県拉揽小学校の三十六人の生徒を対象に「楽しく学べる希望キャンプ」を催し、山間部の排焼村と董術村で、親が出稼ぎに行き、村に取り残された子供たちを励ました。

三都スイ族自治県は全国で一、二を争う貧困県である。若い人は沿岸地方に働きに出る。半年か一年に一回帰郷するだけで、子供を親に預けたり、預ける先がない時には、一人で取り残される子供も

いる。

拉撹小学校の三百十六人の生徒のうち、祖父母に預けられている子供は二百人ほどで、六十八人が一人暮らしである。八月七日と八日に行われた「楽しく学べる希望キャンプ」では、『西遊記』の三蔵法師とその弟子たちが拉撹小学校にやって来たという物語で幕を開けた。慈青たちは知恵をふりしぼってキャンプの内容を考えた。要所要所で上手にスイ族の文化を取り入れることで、子供たちにゲームをしながら故郷の言葉と文化の美しさを感じてもらうと共に、自分の役割をどう果たすかを学べるようにした。

慈済ボランティアが五、六歳の時から見守ってきた羅甸県水淹塘の女の子、姚春芝は今はもう大学一年生である。彼女はボランティアの中でも、年齢に比べて落ち着きがあり、大人びていた。

彼女は三都県の小学生たちに、「私の小さい頃の夢は、大人になったら出稼ぎに行ってお金をたくさん儲けることでした。しかし、大人になってから、勉強することこそが貧困から抜け出し、大山を離れる唯一の道なのだと気づきました」と言った。

彼女は、「未来に向かって歩むと共に、困難に挑戦し、自分は他人よりも劣っていない、と自信を持つべきです」と皆を励ました。

二十年経っても側にいる

鍾天光は貴州大学医学部臨床医学科の学生で、十四人の青年志願者の中で唯一の男性メンバーである。中学生だった頃、彼は家族を代表して慈済の配付物資を受け取りに行っていた。中学校と高校は慈済の就学援助で卒業することができた。

「我が家が一番困っていた時、慈済が衣類、布団、食事の支援をしてくれました。学費も払えなかったので慈済が就学助成金を支給してくれました。僕は子供の頃から大人になるまで人の支援を受けて来ました。だから、僕も人助けをしたいのです。医学を志すのは郷里に恩返しするためで、家庭が貧しく、医者にかかれない人たちを助けるのです」

二十年前、慈済ボランティアが貴州に足を踏み入れた時、外部と接触する機会が少なかった村民と子供たちはびっくりして慌てふためき、どうしていいか分からなかった。この紺と白の制服姿が彼らをその後もずっと見捨てず見守り続けてくれることになるとは、夢にも思わなかった。

あの時から二十年後、彼らは今、石の合間に花が咲き、野山いっぱいに広がるように、力強く光明に向かって人生を歩んでいる。

夢を達成する勇気

貧しさゆえに多くの農民は
大山を離れる決心をし、
まっしぐらに大都会を目指し、
見知らぬ土地で
貧困から抜け出す夢を追いかける。
しかし、貧富の差が
ますます広がる現実において、
貧困から抜け出す夢を
追いかけるうちに、
故郷に残った子供たちには
もはや幼児期というものはない。

◎文・林玲惘　訳・済運

キャンプは『西遊記』の三蔵法師と三人の弟子たちが拉撹小学校を訪れる物語で始まった。師弟四人は拉撹小学校の生徒と一日過ごしただけで、多くのファンができた。夜の集いで再び登場したとたん、子供たちは大声で叫びながら拍手した。

夜の集いは校庭で行われ、日が暮れかけても昼間の暑さは残っていた。子供たちは校庭で静かに、次のプログラムを心待ちにした。

プログラムが進行するにつれ、知らない間に灼熱の太陽が沈み、夜の集いにふさわしい満天の星空をバックに、夜が優しく包み込んだ。各チームに蝋燭が灯され、車座になって心のうちを語り合った。

あの夜の月明かり

「一日のキャンプが終わって、どう感じた？　お兄さんやお姉さんに話したいことはある？」。青年志願者の

●三都県村寨の住居は独特の高吊り構造で建てられている。子供たちはこの景色を見ながら、連なる山々を超えて外部に出稼ぎに行っている両親のことを思いながら生活している。（撮影・林櫻琴）

鍾天光は子供たちの心のうちを引出した。

「さっき、姚春芝お姉さんが、『都市の人が私たち、農村の人を見下していないのは、農村の人が都市の人よりも劣っていない証拠』だと言ったよね。彼女の家庭はほかの人よりも貧しかったけど、今はもう大学に通っている、という話を聞いた時、どう感じた？　どうしたら大学に受かるか考えたことある？」

優しい星の光が地上を照らす中、チームメンバーの石錦英が勇敢に手を上げた。「今日、姚春芝お姉さんの話を聞いてとても感動しました。姚春芝お姉さんはとても勇敢だから、彼女が怖くないと言えば、私も怖いと思わず、勇敢になります。私はきっとお父さんに大学合格通知書を見せます。それはお父さんの夢であり、私の夢なのです」と彼女は涙を流しながらも話す言葉はしっかりしていた。

楽しく学ぶキャンプが終わってしばらくしてから、第三チームを担当した青年ボランティアの楊雲はまだ最初の場面を覚えていた。「錦英は涙をぬぐって私に笑顔を見せました。私は彼女の真心に感動しました。彼女の涙は心の灯に輝き、その光は空で最も美しい星のようでした」

夜の集いが終わりに近づいた時、空に別の景色が現れた。その日は旧暦の十五日で、明るい満月が拉撹小学校の校舎の後ろから顔を出した。その静かな美しい月を見ていると、まるで水が滴るような音が聞こえてくるようだった。

この世に終わりを告げない集いはない。皆で手を取り合い、大きな輪となって「愛を広めよう」という歌を歌った。慈青の王冠智は感情を高ぶらせながら、「皆で過ごしたキャンプ、そして、空の満月を見上げ、同じ空の下にいることを思い出して欲しい。私たちは遠くにいるのではない、心が繋がっているから」と言った。

過ぎた時間

チームリーダーは子供たちを寝室に連れて行ったが、慈青たちの心にはまだ余韻が残っていた。誰もいない校庭で月と蝋燭の明かりの下で感想を述べ合った。

慈青たちの感想は笑いの中に涙があり、キャンプでの出来事や一言、一瞬を子供たちが成長するまで忘れず、彼らの人生に役立てて欲しいと思った。

慈青という団体ができて今に至るまで、慈済教師懇親会の黄雅蘋先生はずっと付き添ってきた。「私たちは楽しさを皆に与えることに成功しました。しかし、

●貴州青年志願者の姚春芝（右端）と和黄秋蘭（右から3人目）は拉攪小学校の男の子7人のチームを受け持った。育ち盛りの男の子たちはじっとしているのが難しく、2人はまとめるのに苦労した。（撮影・陳麗雪）

彼らの心にどのような希望を植えつけたのかを忘れてはいけません。これは大事なことです。子供たちに感動を与えたかも知れませんが、それは時間と共に薄れていきます。しかし、私たちの心にある愛と使命感が時間と共に成長してこそ、ある時期、ここで奉仕したことが無駄でなくなるのです。今、皆さんは慈青の制服を着ていますが、卒業してからも先輩たちと同じように、慈済という大家族の中で再会することを期待しています」と彼女が感想を述べた。

山道を行く子供

満月が沈み、太陽が昇った朝、都柳江はいつものように満々と水を湛え、拉攪小学校脇の上流を流れていた。

青い山、明月、河の流れ。どんなに美しさに溢れていても、親の寄り添いに取ってかわることはできず、子供たちに未来への方向を示してはくれない。彼らは今年、拉攪小学校を卒業し、青春真っ盛りの年頃になる。第六チームリーダーの青年ボランティア、陳東萍は、「彼らはいたずら好きで、無知で言うことを聞かない子供たちであると同時に目立ちがり屋で、人の心をも動かします。もし、彼らを理解せず、聞く耳を持たなければ、彼らはただの第六チームの四人の嫌な子供に過ぎないでしょう」と言った。

彼らの孤独感とためらい感を感じ取りながら、二日間のキャンプは「文化」、「読書」、「肉親の情」という三つの課題の下に行われた。青年たちが子供たちの手を取り、愛が穏やかな風のように流れた。それは見ることも触ることもできない

が、力となって大山の子供たちに夢は遠くないことを悟らせた。そこにいるお兄さんやお姉さんたちもそうやって歩んで来たのだ。

山に帰る道程が遠いため、八月七日にキャンプ活動を行い、八日の午後三時に終了して早めに子供たちを帰らせた。皆で校庭から校門まで愛の架け橋を作り、小学生たちは涙を浮かべてお兄さんやお姉さんたちと手をタッチしながらくぐり抜けて行った。

中には外に出てから戻って来る子もいて、お兄さんやお姉さんとの連絡方法を書いてもらった後、やっと帰って行った。

また、学校の外の橋の上から校庭にいる紺と白の制服姿をいつまでも見つめたまま帰ろうとしない子もいた。「さようなら、また会う約束をしたからね」とこっちの方にいるお兄さんやお姉さんたちも顔に汗と涙を滴らせたまま、力いっぱい手をふって叫んだ。

二日間のキャンプが終わり、チームメンバーは後片付けしてから三都に帰った。夜中に雷雨が発生し、風が吹き荒れる中、市全域で停電になり、皆、真っ暗な中、手探りで懐中電灯をつけて顔を洗った。

より困難な挑戦が待っていた。大山での家庭訪問は高く険しい山を越えなければならないが、昨夜の大雨で数日前の青々とした山が消えていた。都柳江上流のダムが放流し、大量の濁った水が下流に向けて流れていた。

車が拉撹小学校を通った時、数人の子供が荷物を背負って歩いていた。昨日のキャンプに参加していた小学生たちだった。「車を止めて！」。年上の慈済ボランティアが叫んだ。「彼らを家まで送ろう」

子供たちは車に乗ろうとせず、一層早足で歩いた。ボランティアの林玲悧は車を降りて追いかけた。

「この道は歩き慣れているから、大丈夫だよ」と下を向いたまま、止まろうとしなかった。この子らは一番遠い董術村に住んでおり、村に向かう車に乗り遅れたために、教師が彼らを宿舎に泊まらせたとのことだった。

「私たちは排焼村に行くから、途中まで乗って行って、そこから董術村まで行けば少し近いんじゃない？」と玲悧は説得してみた。

「僕たちはいいよ！」「慣れてるから！」。半分無理強いして、やっと子供たちは車に乗った。

フィリピンやネパールで台風や地震で家をなくした子供たちはそれでも笑顔を見せる。テント住まいで三食まともに食

べられなくても親と一緒であれば、そこが家となり、子供たちは安心して暮らすことができるのだ。しかし、これら留守番の子供は高齢の祖母と一緒の場合は幸いな方で、中には一人で生活している子もおり、困難な成長過程で笑顔をどこかに置き忘れてしまった。

親を思う時

「気をつけて！　道が滑るから」と家庭訪問第五チームの慈青、王冠智が林櫻琴師姐（師姐（シージェ）は慈済の女性ボランティアに対する呼称）の手を取りながら注意を促した。高吊り式家屋は山に沿って建てられていて、大雨になると泥が急な山道を滝のように流れ落ちる。

石錦英は右に左に曲がりながら皆を家まで引率した。子供が学校に入る前に両親は出稼ぎに出ており、その時から祖母と二人で寂しく十数年も過ごしてきたが、今回、付き添ってくれる人がたくさんできた。

祖母は早くから戸口に出て皆を歓迎した。弟の石錦豪はまだ、幼稚園に入る前の年齢で、楽しそうに皆の前や後ろを走った。高吊り式家屋の庇（ひさし）は二重になっていて、雨がひどく降っても、直接室内に

●姚春芝は長年付き添ってくれ家族のような存在となっている台湾の慈済ボランティア、林櫻琴を見るなり抱きついた。（撮影・林玲俐）

入ることはない。皆が楽しく昼食の準備をしていた時、青年ボランティアの陳東萍は錦豪と一緒に「美人座」と皆が呼ぶ木のベンチの上に乗って手を雨の中にさし出し、童謡を歌って遊んだ。

ボランティアは「普段、お姉さんは学校に寄宿していて、おばあさんは農作業に忙しいけど、錦豪はご飯はどうしているの？」と聞いた。この地方の農作業は平地と違い、牛を追って山の高所でするため、仕事が終わって牛に餌を与え終わる時はすでに日が暮れ、そこから山道を歩いて帰るのである。

彼の答えは「一人で留守番し、あちこ

ちで遊び、運が良ければ、どこかの家でご飯を一緒に食べよう、と引き留めてくれる」というものだった。推測するに、錦英も学校に寄宿する前はこういう日々を過ごしていたのだろう。

「皆、早く！　すごくきれいだよ！」。雨が上がり、谷から山に水蒸気が勢い良く吹き上げられていた。しばらくして霧雲が渦を巻き、山村を隠してしまった。多くの人は大金を払ってこの仙境の美しい景色を見るためにやって来るが、石錦英は幼い時からこの絶世の美景の中にいる。両親を思いながら、キャンプで突然たくさんの仲間ができ、とても楽しい。

「初めは怖かった。クラスで大きな掌を描き、そこに自分の好きなことを書く時になって、初めて皆のことが分かりました」。小さな木の腰かけに座って、錦英と冠智、東萍は楽しく語り合った。「それから、ゲームの時に走り回り、大汗をかきました。お兄さんやお姉さんたちと一緒に、あなたたちがこんないっぱい用意してくれたのを見て感動し、涙がこぼれました」

天真爛漫な子供は貧しさの大変さを全部理解しているとは限らないが、両親がそばにいない孤独感は正に現実のことである。

慈青先輩の荘琬婷は彼女自身の人生経験を語った。お姉さんたちは歳が離れていたから一緒に遊べず、彼女自身も経験者として錦英に孤独に立ち向かう方法を教えた。「私が小さかった頃、同じように遊んでくれる人がいないので、一人二役を演じてトランプゲームをしたのよ。どんな手を出してくるかななんて想像して」。彼女は錦英に「お母さんを思う時、その気持ちを解決する方法があるわ」と言った。

「私は日記に自分の気持ちを書いたわ」「大きくなって日記を読み返した時、幼かった頃の気持ちが分かるのよ」と荘琬婷が言った。また、日常生活で体験したことを書いておき、両親が帰って来た時に日記に書いたことを話してあげれば、あなたの成長過程でのさまざまな出来事に両親も関わっているように思うはずだ、と教えた。

慈青の王冠智も自分の成長過程での経験を錦英に話した。彼の父親は博打で大きな借金をし、彼は学校に通いながら五つの仕事をかけもちしてやっと自分の学費と生活費をまかなっていた。「僕らは健康に気をつけて、親に心配をかけないことだよ」

彼は錦英に「じっくりと時間の使い方

●家庭は裕福ではないが、呉徳懐（左）は両親と一緒に暮らしている。慈青の王冠智は勉強が好きな彼を励ました。（撮影・荘琬婷）

を考えてみなさい。僕は慈青に参加してから毎日がとても忙しくなった。疲れないかとか、勉強はどうしていると、友人が心配してくれる。確かに友人との時間は犠牲にしているが、ボランティアになったら、もっと多くの友人ができたよ」と言った。

「少しでも止めようかと言う気持ちがあってはいけない。否定的な思考に打ち負かされてはだめ！」と冠智は錦英の目を見ながら言った。錦英は皆の手を握って「一生懸命勉強します。お父さんに喜んでもらいます」と言った。

「高校生の時に慈済と出会って支援を受け、大学にも受かったわ」。陳東萍は経験者として錦英を励ました。農村の子供は頑張って勉強すれば、その閉塞的な環境を離れるチャンスに恵まれ、自分で人生を決めることができる。「大学二年生一学期の時に支援を断ろうと決心したわ。誰かもっとそのお金を必要としている人がいるはずだから、私も支援する側になることを決めたの！」と彼女が言った。

誰が付き添うの？

家庭訪問は全部で十二チームに分かれて行われ、それぞれのチームには慈済ボ

ランティアと台湾からの慈青、貴州の青年志願者が参加した。時間が逆戻りしたように、子供たちを見ていると、自分たちの過去が思い出された。

「苦を見て福を知る」「彼らを見ていると自分の幼い頃を思い出す」という二つの言葉は、これら青年たちの思いではないだろうか？　家庭訪問を終えた日の夜に行われた感想会では、涙によって皆の心がより柔和になり、互いの距離はさらに縮まった。

その日、拉撹小学校からバスに乗り、一緒に排焼村に来たキャンプ参加者の潘小艶と潘英霞は、家庭訪問を終えても排焼村を離れようとしなかった。

慈青の許嘉玳は彼女たちがどうやって董術村に帰るのか心配だった。聞くところによると、家までの道程は六キロで、約一時間はかかる。「六キロというのは小さな女の子には大変な道程なのに、どうして彼女たちは帰ろうとしないのか？　それは私たちと一緒にいたかったからです」

嘉玳の話を聞いて、慈青の先輩の李仁耀が皆に質問した。「どうして彼女は帰ろうとしないのか？　それはここだったら、付き添ってくれる人がいるから。そうだとしたら、僕らは彼女たちに引き続き付き添っていけるか？」

中国の青年ボランティア、羅必語が発言した。彼女の言葉は成長した「自分」が幼かった頃の「自分」に話して聞かせたものである。「家庭訪問する時の山道が細い泥道なのを見て、可哀想だと思うかもしれない。以前私もそう思った。だが、『家に帰る道がある』『電気がなければ、月明かりで仕事ができる』と今は思う」

「誰も彼らに模範を示すことができなければ、彼らは親の生活を真似るだけです。私たちが経験者として大学までの人生を導き、付き添いたいのです。農村の

●屋根裏部屋は呉徳懐のお母さんが機織りする場所で、貴州青年志願者の陳東萍は彼女から機織りの技術を学んだ。（撮影・荘琬婷）

●台湾と貴陽から来たボランティアは三都水族村寨で家庭訪問し、勇気を持って夢を追い、人生を変えるよう励まし合った。（写真提供・林櫻琴）

人にとって、勉強は唯一の道ではないとしても、最良の道なのです」と言った。

必語は慈済の支援を受け、今は貴州民族大学の学生である。「慈済は私に付き添って長いのですが、半分は付き添ってくれ、半分は自分で成長したからこそ、より良い人生を長く歩んでいけるのです。台湾の人々は私たちを励ますために、遠く台湾から来ているのです。私たちは引き続き励んで、この愛を伝承していきたいと思うのです」と彼女が言った。

独りと大勢

台湾の慈青たちは勇敢に快適な環境から一歩踏み出し、最高の効果が発揮できる文化交流を成功させた。情熱と勇気で対岸の支援を受けている青年志願者と大山に生まれた運命の子供たちを受け入れた。彼らには恵まれた環境はなく、常に向上心を忘れず、自分自身に打ち克たなければならない。

「六キロの道を独りで歩くのと大勢で歩くのは違います」と中国青年志願者の姚春芝は慈青の先輩の李仁耀の質問に答えた。「私たちがかつて付き添いを受けて夢を成就したように、再び戻って来て、彼女らに付き添ってあげたいのです」

感動的な出来事が多過ぎて、全部書き出すことはできないが、最後に一つ言いたい。支援を受けた陳東萍のことは覚えているだろうか？　排焼村を訪問した時、彼女と錦英は同じように、錦豪のような弟がいたが、唯一違うのは弟が一人で留守番していた時に蒸発してしまい、未だに行方が分からないことだ。

東萍は成長過程で、幸いにも心の扉を開けてくれる人がいた。彼女のこの世の善念や善行が全て弟のためになることを信じるよう教えられた。キャンプが終わった

後、彼女は友人たちに、皆で村で留守番する子供たちに関心を持つよう訴えた。

「彼らは親と一緒に生活することができず、良好な日常の学習環境もないが、彼らには無限に大きな大山がついている。大山は彼らに四、五歳から一人で生活する方法を教えている。虐められた時はどうやって勇敢に対峙するか？　どうやって楽観的になって生きて行くか？

遠くからやって来た家族として、会ったことのない家族を訪問しても、家族として迎えてくれる。あなたが心を開いた時、感動するような経験が聞ける。彼らは表現の仕方は下手でも、最も純朴な夢を持っている。彼らの夢はいたって単純で、頑張って勉強し、いつか一度両親と一緒に北京に行ってみたい、というものだ。学習を通して家庭の運命を変え、外の世界が見えない大山を離れることなのである」

「多くは期待しないが、私の文章を見て固定観念を変え、心を修行する時、他人に夢を追いかけるチャンスを与え、運命を変える希望を持たせてあげたい」と文章をしめくくっている。これは文化交流に参加した全てのメンバーの願いだ。さあ、手を携えて愛を広めていこう！

（慈済月刊六一一期より）

世話して来た慈青たちが成長した

慈青たちは苦を見て福を知り、貧困を見て足るを知っただけでなく、互いに成就を助け合い、自ら責任を担うことも学んだ。それは得難い貴重な人生経験であると共に、流した涙の潤いで彼らの青春を豊かなものにした。

◎文・陳廉忻　撮影・陳麗雪　訳・性和

多くの大学生にとって夏休みは、娯楽とアルバイトに明け暮れるものでしかない。しかし、慈青（慈済の学生ボランティア）たちは一風異なったことを学ぶ。

いろいろなキャンプ活動から医療ボランティアまで、スケジュールがびっしりつまり、もし、人一倍の体力と超人的な強い使命感を持っていなければ、持ち堪えられないだろう。様々な活動に参加している彼らの姿を見ると、涙を流さずにはいられない。

ここ数年、私は夏休みの到来が待ち遠しく、世話して来た慈青たちに付き添うためにできるかぎりいろいろな活動に参加している。それは、さまざまな若い世代とどう付き合うかを学ぶほか、彼らに対して母親であり、友人でもあるような役割を果たすことで、證厳法師の代わりとなって一つひとつの菩提の苗を大切に世話したいと望んでいるからだ。

二〇一七年、慈済大学の青年海外人文交流活動では初めて、北区、中区、南区の慈青たちが自ら責任を持って活動を企画した。北区の慈青は縁があって、石の王国と言われる、中国の貴州省に行くことになった。慈済はすでに二十年間、現地の貧困家庭を支援し、助学や配付活動を数え切れない程行ってきたが、慈青が現地の青年志願者と人文交流をするのは初めてだった。

慈青たちは勉強やアルバイトの関係で、企画会議にはいつも最小人員しか集らず、見ていて気が気でなかった。幸い、合宿研修のとき、慈済基金会の職員である荘琬婷と潘培菁がいつも高いＥＱで以て、にこやかな顔で緻密な考えを分かりやすい言葉を使って、慈青らをスケジュールの企画へ導いていたほか、アイディアに富んだ各種学習課程や各分野のエキスパートを招いて「武術の極意」の伝授など企画を手伝った。おかげで、出発する前に私たちは、すでに収穫でいっぱいだった。

準備万端な貴州の青年志願者と会って、慈青たちは、彼らの積極的な態度と強い学習意欲を目の当たりにした。また、自分の足りなさと今回の責任と使命を痛感し、自分たちを奮い立たせた。

彼らは怯えと焦りの気持ちを積極的な思考に変え、気を張りつめて、いつでも変化に応えられるよう心の準備をした。王冠智は、「現地の青年志願者たちは私たちを団結させてくれました。ここで気をゆるめたら、この学ぶ意欲を持った子たちに申し訳が立ちません」と言った。

萬星顯は、「与える側と受け取る側は必ずしも絶対的ではなく、私たちは常に心の準備をしていなければなりません」と言った。

高昕妤は、「青年志願者の純粋さと強

●かつて拉攬小学校の活動に参加した子どもが苗族の民族衣装を纏って、ボランティアの家庭訪問を歓迎した。皆大喜びで、慈青の許嘉玳（写真右）は苗族の衣装と髪飾りを付けてみた。

い意志に接して、夢ばかりを追う複雑な自分を恥ずかしく思いました」と言った。

郭秀蓁は、「私たちにはこの活動しか目に入りませんが、彼らが見ているのは『人生』です」と指摘した。

張詞涵は、「青年志願者は活動を通じて、一言も文句を言わず、

彼らに敬服しています」と言った。

許嘉玳は、「青年志願者のおかげで、自分の変化に気づきました」と言った。

今回の貴州人文交流活動で、慈青たちは苦を見て福を知り、貧困を見て、足るを知っただけでなく、互いに成就を助け合い、自ら責任を担うことも学んだ。人生において、何と得難い貴重な経験をしたのだろう。

貴州で、慈青たちの目は毎日、感動にあふれていた。毎晩、深い感慨を覚えた心は人生の学習であり、涙の潤いは彼らの青春を豊かなものにしたからである。

慈青たちは、青年志願者や留守番の子供たちに、一対の「色彩豊かな翼」を残していった。それは彼らに付き添って大山から飛び立たせるものであった。そして互いに拍手で「愛を広げる」約束をした。

もし、今回の交流で最も成長したのが慈青たちなら、最も多く収穫を得たのは私だろう。なにしろ、我が子のような慈青が成長したのだから。

（慈済月刊六一一期より）

【證厳法師のお諭し】

生命を善用して慧命を成就させる

◎訳・慈願　絵・林建宏

人生は一日過ぎれば一日短くなります。

身体機能は衰えても、良能を把握して

初心を守り、命の限り慧命を増長することができます。

一月、一年と過ぎ去り、旧暦の正月がすぐそこにやって来ています。子供たちは新年を迎えることを喜びますが、お年寄りは少し寂しくなります。なぜなら、日が過ぎると命はそれに従って少なくなり、少ない水の中の魚のように、何の楽しみもない、と感じるからです。

人生で生老病死を避けることはできません。「生」を祝い、「老いる」まで生きるのもよいことです。しかし、「病」を思うと恐ろしく、「死」に至ってはどう慰めればいいのでしょうか。

二〇一八年、世界の人口は七十四億に達しています。人口の増加と聞くと、この世は平穏だろうかと思わずにはいられません。もし、人口がますます増

えて、ぼんやり過ごす人が増えれば、世の苦しみは筆舌に尽くし難いものになります。

毎年、年を越して新年に花火を打ち上げますが、どんなにお金がかかって、大気汚染を助長しても、人々はやはり、たまにしかない新年を迎えるのに必要だと思っています。寒い中で長時間待たされても、一刻の花火と煙を楽しむのです。

私たちはその日を得難いと思っていますが、世界にはその日を得難い平穏な日と感じる苦難に喘ぐ人がたくさんいます。寒さと飢餓の中で生活をしているのです。慈善団体が炊き出しをしているとはいえ、どれだけの人が援助を受けられているでしょうか。

最近、ニュースでよく大気汚染について報道していますが、空気中の汚染濃度はとても高いのです。「五濁悪世」とはその実、人の観念の偏りによるもので、大なり小なり作り出されたものは全て自然破壊をしないものはありません。日本人は感冒を「風邪」と言います。体がウィルスに感染すると、調和が取れなくなって病気になります。人心もまた注意すべきで、わずかな邪気や邪念によって欲の扉を開ければ、消費し続けて物をため込み、古い物を捨ててゴミを作り出します。それが埋められても、焼却されても、汚染に変わりはなく、空気や水源や土地に影響し、最終的には人体に回帰して種々の病気をもたらすのです。

天災は恐ろしいものですが、人災はもっと怖いのです。尽きない欲望は、一があっても九足りないと考え、百、千、万、億と追い求め続け、欲望が満たされないまま生涯を終えます。人と人の見解が異なって争いになると、社会や国家を混乱に陥れ、人々の生命を脅かします。

大地は繋がっており、空気も通じ合っています。天災や人災は、一国家や一地域だけの問題ではありません。自分自身を改善するだけでなく、世のために責任を負わなければなりません。

地球を修復する先導者になることを発心し、慎んで戒めて、己の内心を清め、人々に正しい道を歩むよう影響を与えなければなりません。消費を物を惜しむ考えに変え、物を大切に使うこと、また食に対する欲を慎み、あらゆる生き物を愛護すべきです。

人はお互いに尊重し合わなければなりません。もしも良し悪しを議論し、引き下がらずに悪意で以て対決すれば、ごたごたしている間に時間や人力、物

を浪費して物事を複雑化し、世の中を不穏にさせます。

新年を迎える年末に際し、過去の煩悩無明をさっぱりとなくし、今この時から一秒をも惜しんで方向を見失うことなく、明るく清らかな心にすべく、毎日欠かすことなく自分の人生の歴史を自分で書いてゆきましょう。

常に真心で善意に思惟し、
着実に行動に移して
人生を美しいものにする

今年の元旦、大愛テレビ局が二十年目を迎えましたが、人生で言うと正に青春、活発でピュアな時期にあたります。開局当時は「大愛で世界を明るくする」使命を託しましたが、今では実体のある真、善、美を現すことができるようになりました。

過ぎた日々を思い返すと、感じるところが多々あり、大変な道程でした。大愛テレビ設立当初、皆が責任が重過ぎると私のことを心配し、困難な志業に賛同しない人がたくさんいました。しかし、「正しいことはやればいいのだ」と考え、普遍的に人心の浄化と衆生の済度を願ったのです。

今は情報の発達に伴い、逆に多くの人がメディアの報道を信じなくなっています。私は慈済のメディアが正しい情報を発信し、世の中の出来事を人々に知ってもらえるよう願っています。なぜこれほど気候が極端に変化し、こんなに災害が頻発しているのかを理解するとともに、正しく生態全体を認識することで、源から改善すべく行動に移してこそ、気候の不調を緩和することができるのです。

人々が心と行為を調整して、天地を護り、地球の生態秩序が乱れないようにすること。すなわち心根を守れば、この世に人災は起きません。共知、共識、共行があってこそ力を集結させることができるのです。

テレビでたった一秒間放映するだけでも多額のお金がかかるとよく聞きます。ですから一分一秒を大切にして、「正しい報道」をすべきです。大愛テレビのすべての番組、ニュース報道によって「耳から心に通じ、目から鱗が落ちる」ようになることを願っています。人々に透徹した内容を見てもらい、聴き入れる耳を持たせ、心に達するようにするのです。毎日喜んで大愛テレビをつけ、世界が輝くようにするのです。

メディアの科学技術によって、人心に清い泉が湧き出るように、絶えず仏法の清流を各家庭に流せるようになりました。法が心に入れば、心の迷いが解かれ、正しい思惟に導かれ、煩悩が消えるだけでなく、人生を転じて社会にとって有益な人材になることができるのです。

大愛テレビ局のスタッフが人文の慧命を守っていることに感謝しています。修行者が「人類のために歴史を書き、時代を見証する」と誓願するように、この世の大蔵経や人間菩薩の活動を後世に残し、現代の模範を未来に伝承するのです。

リサイクルボランティアに感謝します。彼らは日夜休むことなく、少しずつ大地を護って大愛に変えています。回収資源は清流となって世界を巡って人心を浄化し、大愛テレビ局を支えてきました。

人文真善美（筆耕）ボランティアにも感謝します。彼らは各地域の至る所に分布していて、生きた報道や世の中の見証を行って、ニュースや番組を提供しており、大愛テレビ局の膨大な数の記者グループであるといえ、名実共に「慈済大愛人員」なのです。

悔いなく人文志業を愛護している慈済人たちにも感謝しています。彼らの愛護がなければ、今日の大愛テレビ局はなかったでしょう。

大愛テレビ局の真善美は設立当初からの方向であり、過去、現在、そしてこれからも、永遠に逸れることはありません。人文の功能と良能は人心の浄化であり、メディアや文字、声音、行動の中に表れています。あらゆる思いが誠実で全ての思惟に善が宿り、心を一つに共に歩むのです。善なる考え方をすることを立願し、自分の思惟を守って真と善があれば、人生を美しいものにすることができます。

心の起伏は避けられないが
些細なことで畏縮せず
団結と協力でさらに愛を広げる

五十数年前、私が印順導師の下に帰依した時、「仏教のため、衆生のため」という教えを守ることを人生の目的としました。以来、私の念はそれ以上でもそれ以下でもなく、逸れることなく歩んでまいりました。

日々感謝と忍びない気持ちでいっぱいです。弟子たちの誠意をもった精進

や世のための奉仕を見ると、感謝には無数の愛のエネルギーがあるからこそ、今日の慈済の成就があることが分かります。多くの人が勇敢に発心しても、一旦問題に直面した時、心のわだかまりを解くことができず、心に傷を負ってしまうのです。そういう状態で慧命は続けられるでしょうか？　私はそれが忍びないのです。

世の中の苦難に喘ぐ衆生を憂慮する時、弟子たちの定まらない慧命を心配し、その重い責任に誰が真に協力してくれるでしょうか？　世の中のことを思うと疲労と孤独を感じます。

昨年十一月の歳末祝福会の時、疲れた心を引きずって行脚に出かけました。台北と台中で海外ボランティアに慈済委員の認証を授けた後、南下して彰化の歳末祝福会に臨み、舞台の上で十人くらいの「記憶保養クラス」のお年寄りたちの劇を見ました。彼らは認知症のため、自分の状況がはっきりしないようでした。その中には私よりも若い人も何人かいました。以前、私は自分が年取ったとは思っていませんでしたが、その日、自分も年寄りなのだと驚きました。

次に行った雲林では、九十歳、八十

歳、七十歳のお年寄りたちが皆、リサイクルボランティアをやっているのを見ました。お年寄りは新年や節句を大切にします。例えば旧暦の正月一日に仕事をしてはいけない、さもないとその年は一年中仕事に追われると言われています。しかし、彼らは三百六十五日休まずリサイクル活動をしています。人生ではリサイクル活動と大愛は単純であると同時に、容易なことではないのです。

彼らは説法はできませんが、法を実践し、それも誠実に実践しているのです。法が心に入り、煩悩がなくなって初めてあのように美しく、心境が自由闊達になれるのです。彼らは病で死ぬより環境保全を最後の一息までやりたいと発願しました。私は彼らが生命の良能をとても重視していることに心を打たれ、感謝と感動でいっぱいになり、清々しい気持ちになりました。

この菩薩たちの出現が私を奮い立たせてくれました。その日から、立っている時や座っている時は常に背筋を伸ばし、まだ老いてはいけないのだと自分に言い聞かせています。南部を回って花蓮に着くまでの一カ月間、疲れたと思いますか？　確かに疲れるもので

す。しかし、私は疲れてはいけない、生命の河の終点に近づきつつあり、一日過ぎれば一日短くなるのだから、命のかぎり時と争って慧命を増さなければ、と常に自分に言い聞かせています。

老いに衰えはつきものです。だんだん体の衰えと機能の衰えを感じます。人の機能は例外なく衰えますが、それでも生命の良能を発揮する機会を逃してはいけません。

仏陀は八十歳の時に入滅されました。《法華経　如来寿量品》に「仏寿無量」とあります。人は皆もとより仏心が備わっています。ただ仏の説かれた法を学んで生活の中に定着させさえすれば、すなわち仏の精神は至る所に存在し、寿命を永らえることができるのです。

寿命には数も限りもあります。老いたと思わなければ、まだ無量の志業を行うことができます。人生の前半の五十年を「寿量銀行」に預ければ、八十歳、九十歳のお年寄りボランティアも三十歳、四十歳の壮年期でしかないのです。中年のこの段階に、豊富な社会や家庭経験、仁愛、義理、礼節など、成熟した智慧と充実した精力でもって再出発するのです。

「寿量銀行」はいつも開いていて、皆さんの預金をお待ちしています。何歳になっても引き続き精進し、残りの歳月を惜しんで人々のために尽くしましょう。無駄に一日過ごせば、生命は一日少なくなり、慧命もそれに伴って停滞します。もし、毎日、六度万行（布施、持戒、忍辱、精進、禅定、般若という菩薩行）を少しでも実行していれば慧命は増します。

多くの人たちが慈済に加入したばかりの頃は、黒髪でしたが、いつの間にか白髪頭になっています。生活がどんなに変わろうとも「初心」は絶対に変えてはいけません。選択した道が正しければ、起点から目標まで堅持するのが智慧なのです。人生には自然の法則があるため、一層時間を有効に使い、慧命を永続させなければなりません。

自分の信念を尊重して、初心を守り通すことです。心に起きる起伏は避けられなくても、ちょっとしたことで畏縮してはなりません。一人の人間が両手をひろげても何人抱擁できるでしょうか。もし、人々が手を繋げば、この愛は計り知れないほど大きな愛になります。皆さんの精進を願っています。

（慈済月刊六一五期より）

戒を制度とし愛で管理する

内に誠正信実を修め
外に慈悲喜捨の精神を発揮する。

◎文・釋徳侃／訳・済運

健全な志業

十一月二日の教育志業役員会で、證厳法師はそれぞれの慈済学校の校長先生が設立当初の志を守り、誠正信実の原則の下に卓越した成果を出してきたことに感謝した。

「事は人によって成るため、志を持った人を必要とします。それで初めて理想のものができ上がるのです。全ての顧問と役員は長年、同じ理念の下に、慈済の教育に関心を寄せ、協力してきたゆえに、各学校に良好な教育規範を築かせることができたことに感謝します」

法師は次のように言った。「慈済は一貫して、戒を制度とし、愛で管理してきました。戒律を守るには自分の内に誠正信実を修めなければなりません。愛があれば、社会で慈悲喜捨を発揮することができ、教育志業の運営も同じことです」

「誠正信実は法脈の精神で、慈悲喜捨は宗門の精神であり、双方とも教育に根づかせなければなりません。四大志業は社会のニーズに沿って開設されたもので、社会のために強化し、より健全なものにしなくてはなりません。先生たちが慈済の法脈と宗門をよく理解して、同じ精神を持って進み、志業のために人材を養成してくれるものと期待しています」

お年寄りは宝物

「この世はとかく災害が多く、安心して暮らすことができません。自分を戒めて敬虔になり、立願して愛を奉仕するのです。お年寄りでも病弱な人でも、健全な心を持っていれば、体は健康になるものです」。法師は三日のボランティア朝会で、決意の気持ちさえあれば、困難は乗り越えられると言った。

八十二歳の苗栗の慈済委員、陳梅芳は相変わらず活発に、チームメンバーと共に家庭訪問ボランティアをしており、ケア世帯と家族同様の感情を築いている。

朱おばあさんには六人の孫がいるが、そのうちの二人は知的障害があり、ほかの四人はまだ幼い。梅芳師姐たちが朱おばあさんの所に来ると、まずおばあさんを抱きしめてから、持って来た食材で食卓がいっぱいになるほどの料理を作り、一家と豪華な昼食

をとる。

「彼女は優しく人々の心に入り込んでいますが、容易なことではありません。一人ひとりのお年寄りは皆宝物で、私たちの側にある宝庫のように、学びきれない貴重な人生経験を持っているのです」と法師が言った。

慈済潭子病院のデイケアセンターが十月二十六日に起用された。百歳を超えた彰化の黄蔡寛師姐は慈済医療ボランティアとして式典に参加し、簡守信院長や養護ホームの二人のお婆さんと一緒に寿司を作り、人々に年輩者の活力を示した。

法師はこれを機に、心を開いて学習するチャンスを逃してはいけないと激励した。「彼女はいつも何事も心して行うため、技を学んで達人になれるのです。功能と良能を発揮して人の模範となるのです」と法師が言った。「社会のニーズに沿って、慈済は勇敢に責任を担い、慈善と医療に始まって今の長期ケアに至るまで、

ボランティアは見返りを求めない奉仕をすると同時に、人同士の交流に歓びを感じ、自分の人生の目標を達成させているのです」

法師は昨日の教育役員会で、今年九十八歳になってもかくしゃくとして、視力も聴力も衰えていない楊思標教授を見かけたと言った。「彼は慈済病院や看護学校の建設を見守り、自らも慈済の活動に投入して支援してきました。今でも漢方医学と西洋医学の統合に尽力されています。昨日の会議の後、私の健康を気遣うとともに、健康維持に関する講演をしたいと言っていました。彼のような医学界の先輩には、まったく敬服し、敬愛しています」

（慈済月刊六一四期より）

善の扉

「慈済ものがたり」をご自宅までお届けします

各慈済連絡所では無料でお配りしています。（月1回発行。1冊）
ご自宅までお届けする場合の郵送料は年間NT$120。
2冊以上ご希望の方は読者サービスセンターにお電話ください
日本に在住されている方は慈済基金会日本支部にご連絡ください

郵送料のお振込み：台湾郵局口座：19905781　口座名：慈濟傳播人文基金會
読者サービスセンター電話番号：02-28989000内線1165
上記の郵送料は台湾国内に限ります。海外または離島の方は読者サービスセンターにお電話ください。

●インターネットでもご覧いただけます。http://web.tzuchiculture.org.tw/index.php?s=7

オンラインでの送付申し込みはこちらへ

慈済大事記二月

訳・済運

02・06

◎「0206花蓮地震」で統帥飯店、白金雙星、吾居吾宿、雲門翠堤などのビルが倒壊または大きな損傷を受けた。慈済基金会は6日午後11時55分、静思精舎に災害支援総指揮本部を立ち上げ、各地区のボランティアから災害報告を収集すると共に支援活動の展開を開始した。午前1時45分には花蓮静思堂に防災調整センターが立ち上げられた。

◎エルサルバドル、パラグアイ、ホンジュラス、グアテマラの4カ国を含む各国の駐バチカン大使ら7名の賓客が慈済内湖環境保護教育センターと大愛感恩科技公司を参観し、資源の回収と分類の重要性を認識すると共に、帰国後、母国で大々的に環境保護運動を展開することを期した。

◎6日夜23時50分、花蓮近海でマグニチュード6・0の地震が発生し、花蓮市内の4つのビルが損壊または傾斜した。花蓮慈済病院は7日午前1時に大量のけが人に対応する緊急治療体制を取り、約300人の医療と事務人員を招集した。一部の地区で血液透析センターで設

02・07	備が損傷したため、花蓮慈済病院は透析センターに病床を増やし、外来患者に対応した。 ◎静思精舎の師匠たちは慈済ボランティアを引率して、「0206花蓮地震」における政府が設置した避難所の中華小学校と県立体育館を訪れ、被災者に證厳法師からの慰問の手紙とお見舞品を手渡した。
02・08	◎6日深夜にマグニチュード6・0の強震に襲われた花蓮では一部の建物が倒壊し、死傷者が出た。花蓮慈済病院は不安に戦く民衆の精神状態の回復を支援するため、8日、「安心医療サービス」を始めた。心身医学科の外来診察のほか、災害後の精神調整講座を設けたり、ホットラインや駐在人員を設置して情報サービスを提供している。 ◎慈済は「0206花蓮地震」災害支援活動で、本日より夜間に重被災地区である雲門翠堤ビル近くに移動キッチンを使った「深夜食堂」を

	開設し、徹夜で救助活動に当たっている人たちに炊き出しを始めた。 ◎慈済教育志業体の教師と学生たちが政府が設置した「0206花蓮地震」の避難所となっている県立体育館に「無料補習」区域を設け、被災した子供たちに付き添った。
02・10	◎「2017年慈済委員認証授与式及び歳末祝福感謝会」が「共に大愛で衆生に付き添い、あらゆる行動で大地を護る」というテーマの下に催された。全国及び海外養成委員・慈誠精神学習会が合計11万人参加して、2017年11月15日から2018年2月10日まで54回開かれ、證厳法師の主催の下に4263人が認証を受けた。 ◎静思精舎の師匠たちが慈済ボランティアを引率して10日と11日、130ヵ所に分かれて国盛里、明意里、国富里、康樂村、太昌村等11の地域で「安心家庭訪問」活動を行った。

02・11	慈済は静思堂で「花蓮を祝福し、祈りを捧げる音楽会」を催した。慈済芸術懇親会ボランティアと慈済ボランティアが一堂に「0206花蓮地震」の被災者を慰めると共に、救助作業に当った警察、消防及び民間団体に感謝した。
02・12	◎「0206花蓮地震」災害の緊急救助が一段落し、花蓮県の傅崐萁知事と立法委員の徐榛蔚が本日午前11時、静思精舎に證厳法師を訪ね、慈済の人力及び物資の投入、民衆の安置への支援と後方支援に感謝した。 ◎「0206花蓮地震」の被害情報が伝わった後、12日までに34の国と地域で慈済ボランティアが各地で募金活動を始めた。
02・13	花蓮県の傅崐萁知事と立法委員の徐榛蔚は本日再び、静思精舎を訪れ、

	「0206花蓮地震」での慈済の災害支援における対応策を理解した。慈済基金会は緊急支援10項目を参考用に県に提供した。
02・15	◎「2018年慈済地域道場新春活動」が行われ、世界9つの国と地域の49拠点のボランティアと志業体職員、計延べ23000人が参加して、15日（旧正月除夜）から20日（旧正月5日）まで録画またはオンラインライブ方式による年始の挨拶が行われ、證厳法師と世界中のボランティアが挨拶を交わした。
02・22	慈済の「0206花蓮地震」支援活動は7日から22日までに延べ86116人のボランティアが投入され、毛布1801枚、炊き出し16803食分、日用品239パック、安心祝福品1111個、救助人員感謝品1592個が提供され、206世帯に慰問金が配付された（続行中）。

各国の連絡所

本部
971 花蓮県新城郷康樂
村精舎街 88 巷 1 号
TEL:886-3-8266779
886-3-8059966
志業中心（静思堂）
970 花蓮市中央路三段 703 号
TEL:886-40510777 ＃ 4002
0912-412-600 ＃ 4002
花蓮慈済医学センター
970 花蓮市中央路三段 707 号
TEL:886-3-8561825
玉里慈済病院
981 花蓮県玉里鎮民権街 1-1 号
TEL:886-3-8882718
関山慈済病院
956 台東県関山鎮和平路 125-5 号
TEL:886-89-814880
大林慈済病院
622 嘉義県大林鎮民生路 2 号
TEL:886-5-2648000
台北慈済病院
231 台北県新店市建国路 289 号
TEL:886-2-66289779
台中慈済病院
427 台中県潭子郷豊興路一段 88 号
TEL:886-4-36060666
FAX:886-4-36021123
慈済大学
970 花蓮市中央路三段 701 号
TEL:886-3-8565301
FAX:886-3-8563604
台北支部
106 台北市忠孝東路三段 217 巷 7 弄 35 号
TEL:886-2-27760111
FAX:886-2-27761244
慈済人文志業センター
112 台北市立徳路 2 号
大愛テレビ局
TEL:886-2-28989999
静思人文
TEL:886-2-28989888

アメリカ
総支部（San Dimas）
TEL:1-909-4477799
北カリフォルニア支部
TEL:1-408-4576969
ハワイ支部（Honolulu）
TEL:1-808-7378885

カナダ
TEL:1-604-2667699

メキシコ
TEL:1-760-7688998

ドミニカ Santo Domingo
TEL:1-809-5300972

ブラジル　Sao Paulo
TEL:55-11-55394091

イギリス
TEL:44-20-88699864

フランス
TEL:33-1-45860312

ドイツ　Hamburg
TEL:49(40)388439

オランダ　Amsterdam
TEL:31-629-577511

スウェーデン　Goteborg
TEL:46-31-227883

オーストリア　Vienna
TEL:43-1-7346988

南アフリカ　Gauteng
TEL:27-11-4503365

中国蘇州
TEL:86-512-80990980

香港
TEL:852-28937166

フィリピン Manila
TEL:63-2-7320001

タイ　Bangkok
TEL:66-2-3281161-3

ベトナム　Hochiminh
TEL:84-8-38535001

ミャンマー Yangon
TEL:95-1-541494

マレーシア
Penang
TEL:604-2281013
Malaka
TEL:606-2810818

シンガポール
TEL:65-65829958

インドネシア　Jakarta
TEL:62-21-5055999
大愛テレビ局
TEL:62-21-50558889

スリランカ　Hambantota
TEL:94(0)472256422

ヨルダン　Amman
TEL:962-6-5817305

トルコ　Istanbul
TEL:90-212-4225802

オーストラリア Sydney
TEL:61-2-98747666

ニュージーランド
Auckland
TEL:64-9-2716976

慈済

２０１８年３月１９日発行・２５５号
中華郵政台北誌字第９０９號執照登記為雑誌交寄
Printed In Taiwan

発行人　釋證厳
発行所　慈済基金会
〒 112 台湾台北市北投区立徳路 2 号
編　集　慈済日本語翻訳チーム
杜張瑤珍・王麗雪
校　閲　山田智美
電　話　(886)02-2898-9000
FAX　(886)02-2898-9994
E-mail: 021620@tzuchi.org.tw

■

慈済基金会日本支部
〒 169-0072　東京都新宿区大久保 1-2-16
電　話　(03)3203-5651 ～ 5653
FAX　(03)3203-5674
E-mail: jptzuchi@yahoo.com.tw
tzuchi@tzuchi.jp

證厳法師のお言葉、委員や会員の体験談、慈済に関するニュース等を日本の方々にお知らせする目的でこの小冊子を編集しました。日本文への翻訳は素人である私たちがしましたので、不備な点や、つたないところがあると思います。ご感想やご教示がいただけますれば幸いに存じます。（日文組編集同人）

最高の笑顔｜南アフリカシリーズ

ダーバン在住のボランティア Abegail Cetyiwe（左）らはポートエリザベスに赴くと現地ボランティアを動員して一緒に家庭訪問を行った。皆は歌いながら貧困と病に苦しむ家庭を一軒一軒訪問し、関心を寄せ祝福を届けた。

（文・袁亞棋　撮影．蕭耀華 南アフリカ・ポート・エリザベス）

慈済ものがたり